

# 耳の神様巡り

桜井 強

deaf@naa.att.ne.jp

日本聾史学会会長・日本手話研究所運営委員

## 1. はじめに（研究の動機）

第10回日本聾史学会富山大会で研究レポート「火吹竹と治聾」の題で発表しましたが、さらにより深く掘り下げたいと思い、新たにテーマが「耳の神様」のテーマに設定をし、探訪する事にしました。

## 2. 現地調査について

2009年7月12日に広島県尾道市因島の耳明（みみご）神社

2009年7月19日に熊本県和水町の耳の神様（柳川由布大炊助の墓）

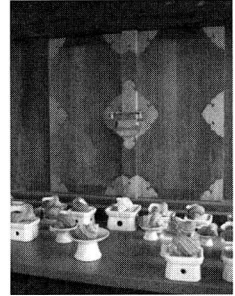
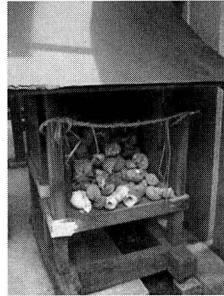
2009年8月1日に愛知県名古屋市の泥江縣神社

2009年8月2日に岐阜県御嵩町西洞の耳神社

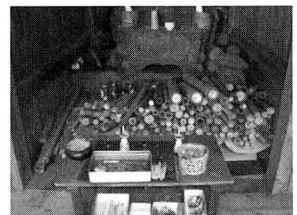
2009年8月29日に茨城県小美玉市の耳守神社

## 3. 耳明神社の由来

昔々あるおばあさんのお孫さんの耳が聞こえなくなると、大変心配されていました。耳明神社に「どうぞこの孫の耳をなおして下さい」と、お願いしたところ、お孫さんの耳が、だんだん聞こえるようになったといういわれがあり、今もなお信仰されています。昔からお参りが多く、叶った方々の口伝で船でお参りされたりしておりました。特殊な信仰としては、貝のさざえの形が、耳の形と良く似ているということで、さざえの殻の中にお酒とお米を入れお供えをしますと、よくかえてくれると伝えられています。

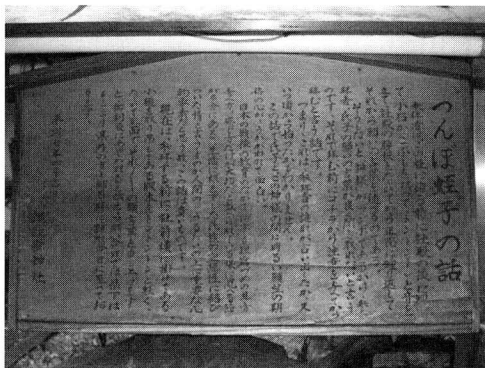
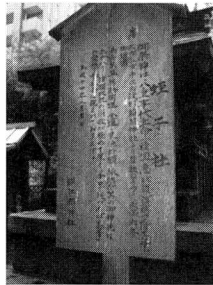


4. 耳の神様（柳川由布大炊助の墓）の由来  
天正15年（西暦1587年）12月、佐々成政の要請を受け、和仁一族の田中城攻めに参戦した大炊助は、豊後由布氏の一族で、筑後柳川城主・立花宗茂の家人であった。騎馬大将として先頭に立ち、大手門より攻めいく中で、家来から「危のうござる！お下がりにござれ！」と強くともめられるが、もともと耳が不自由な大炊助には聞こえるはずもなく、城中から放たれた矢に胸を射抜かれ討死したという。それを伝え聞いた村人達は、大炊助を丁重に葬り、代々供養をし続けてきたことが、後の悲話として語り継がれている。墓前には、火吹き竹が供えられ『耳の神様』としてまつられている。参拝の方法としては、火吹き竹を借りて吹いて耳にあてる。お礼参りには、新しい火吹き竹を奉納する。



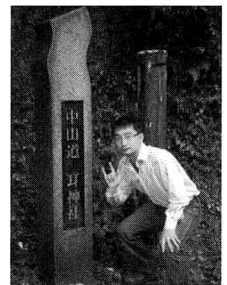
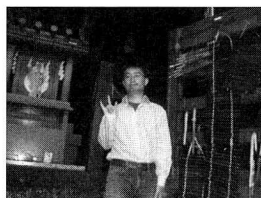
## 5. 泥江縣神社の「つんぼ蛭子」の由来

参拝者は、この社に詣る前に社殿の後ろに廻って、小石か、こぶしを持って、トン、トン、トンと音を立て、社殿の腰板をたたいてから正面に廻り返して、それから願いの言葉を述べるのである。そうしないと「神様」がツンボであるから、参拝者、氏子の願いの言葉が良く聞き取れないというのです。それで拝む前にコチラから注意を与えてから拝むと言う話です。つまり、これは、参拝者の誰れが言い出したか、又いつの頃から始まったかもわかりません。この話で氏子と、この神様の中に明るい願望の期待の心が、うかがわれて面白い。日本の戦後の教育のなかれ、何事も理窟づめの見方考へ方、感じ方だけが大切だと教へられている様に思へる節が多分にある。生活に根を下した民族の空想性に結びついた情と言うものが人間のうるおいの上に重要な心的要素だと思う故、この話は貴いものです。現在は、参拝する前に、社殿横に掛けてある木槌を取り吊してある版木をトン、トン、トンと軽くたたいて正面で、それぞれの願言葉を申し上げますと、御利益にあやかれると伝えられ、今日では県下はもとより県外の方も御参拝に訪れ、今日に至っております。



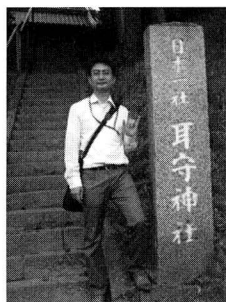
## 6. 耳神社の由来

全国的に見ても珍しい耳の病気にご利益があるといわれる神社です。平癒の願をかけ、お供えしてある錐を一本かりて耳にあてます。病気が全快したらその人の年の数だけ錐をお供えしました。奉納する錐は本物でも竹などでまねて作ったものでもよく、紐で編んですだれのようにしてお供えしました。小さな祠には奉納された錐がいくつも下げられ、人々に厚く信仰されていたことがうかがえます。また、戦前には遠く名古屋方面からの参拝もありました。元治元年（1864）、武田耕雲斎が尊皇攘夷を掲げて率いた水戸天狗党が中山道を通った時、耳神社ののぼりを敵の布陣と思い、刀を抜いて通ったと伝えられています。



## 7. 耳守神社の由来

玉里村栗又四ケ（くりまたしか）には、全国でも珍しい耳の病を治してくれるという耳守（みもり）神社がある。地元では親しみを込めて「みみっちょ神社」と呼ぶこの神社の由来は、第3代常陸大掾繁盛の五男・五郎左衛門兼忠（後に飯塚と名乗る）の千代姫という娘が7歳になっても耳が聞こえず、夫婦は思案の末、熊野神社に娘の耳が治るよう願をかけ、満願を迎えた朝不思議なことに千代姫の耳が聞こえるようになった。やがて千代姫は成長して33歳になったある日、風邪がもとで床に伏してしまった。病は悪化する一方で、ついに明日をも知れぬ身となった千代姫は両親に「われ亡き後に社を建ててもらえれば、耳の病を守護せん」と言って息を引きとった。遺言通り両親は千代姫愛用の鏡をご神体として栗又四ケの地に社壇を設けて「耳守」と号して祭礼を営み続けた。しかし、1590年（天正18）大掾氏は佐竹氏に滅ぼされ、一族である飯塚氏も同じ運命をたどったので耳守神社も無くなり祭礼も断絶したが、その後、地元の人たちが神社を建て直し、姫の命日の9月9日には祭礼も執り行われている。



## 8. 竹の信仰について

竹には穢れや災禍を祓う呪力があると信じられていた。この信仰の段階において竹は清浄潔白の象徴であると考えられます。

## 9. 貝の信仰について

貝殻は宗教的な意味合いで用いられることも多いが、貝を軒にぶら下げて魔除けとしたり、水字貝を、その名から火除けのまじないとしたりする民間信仰があり、その貝が採れる地方で古くから行われてきた。また陣貝として知られる法螺貝は山伏が魔除けに吹くことでも有名である。さざえの貝が耳に似ていることから、さざえの貝殻にお米とお酒を入れてお供えする風習信仰が続いている。

## 10. 考察

竹と耳の治療は、どのような関連があるかどうか考慮に入れなければならない事で様々な領域の専門家が協力し合うことが不可欠となっていることを示すのであってこうすれば問題を整理し、新たな発見を生み出すことができるのだろう。

## 11. おわりに

今後は、これらの説を補強する為により多くの耳の神様巡りの事例を分析してみたいと考えます。

### 【参考文献】

耳明神社URL

<http://mimigo.jinja.net/>

耳守神社URL

<http://www.joyoliving.co.jp/special/historical/kennan/kennan00110.htm>